

氏名	角 南 典 生
学 位 の 種 類	医 学 博 士
学 位 授 与 番 号	乙 第 1513 号
学 位 授 与 の 日 付	昭和59年12月31日
学 位 授 与 の 要 件	博士の学位論文提出者（学位規則第5条第2項該当）
学 位 論 文 題 目	急性頭蓋内圧亢進時における脳幹部の血流変化に関する基礎的研究
論 文 審 査 委 員	教授 大月三郎 教授 中山 沃 教授 寺本 滋

学位論文内容の要旨

テント上占拠性病変による急性頭蓋内圧亢進時の脳幹血流の動態について成猫を用いて実験的に検討した。

- 1) 脳血流は視床 $37.5 \pm 9.9 \text{ ml/100g/min}$ 、中脳下丘 $42.1 \pm 8.6 \text{ ml/100g/min}$ 、延髄 $30.7 \pm 4.9 \text{ ml/100g/min}$ であった。
- 2) テント上圧が20-30 mmHgに達すると視床の血流低下を認め、テント下圧が20-30 mmHgに達すると中脳下丘の血流低下を認め、最後にテント下圧が40-60 mmHgにおよぶと延髄の血流低下をきたした。すなわち延髄の血流は遅くまで保たれる傾向にあった。
- 3) テント切痕ヘルニアの生じる時期（瞳孔不同出現時）に一致して、多数例において急激に中脳下丘の血流が低下した。
- 4) Cushing Response は、テント上圧 $93.4 \pm 14.6 \text{ mmHg}$ 、テント下圧 $49.9 \pm 6.8 \text{ mmHg}$ で出現したが、血圧が上昇しても延髄の血流増加は認め難く、進行性に脳幹血流は減少した。

論文審査の結果の要旨

本研究は急性頭蓋内圧亢進時における脳幹の血流動態について成猫を用いて実験的に検討したものである。脳外科臨床上重要な課題である、テント上圧と脳幹部局所血流量との関係について重要な知見を得たものであり、価値ある業績であると認める。

よって、本研究者は医学博士の学位を得る資格があると認める。